緑雨と秋水
―それぞれの「非戦論」―

塚本章子

はじめに

斎藤緑雨とは、江戸の生き残り、「最後の戯作者」にすぎないのだろうか。私は、拙論「日清戦争後の緑雨 ―国家主義化への抵抗―」[1]において、これまであまり言及されてこなかった日清戦争後から晩年にかけての緑雨の言葉の中に、日本の国家主義化に対する抵抗の水脈を辿り、明治という時代と格闘する緑雨の姿を素描した。少し概観する。

緑雨は、戦意高揚を煽る新聞や雑誌等のメディアを嘲笑し、「日本主義」や「国民文学」を唱えていた高山樗牛と対立する。そして復活する「道徳」への批判を繰り返していく。また、明治三三年一一月、劇場取締規則が警視庁から改正発布され、その第二三条において「勧善懲悪の主旨に背戻する」演劇は「興行することを得ず」[2]と定められたことについて、緑雨は、翌三四年一月大野洒竹に宛てた書簡で、批評家が「一同団結して社会に対抗する」事を訴えている。この抵抗の背景には、明治三一年頃から始まっていく緑雨と幸徳秋水との交友があったのではないか。私はこういったことを指摘し、さらに以下のようなことを述べた。

明治三一年二月の秋水の萬朝報社入社以来、緑雨と秋水に交友があったことは以前からよく知られてきたが、その内実については、あまり考察されていない。[3]しかし、この両者は互いに重要なものを与え合っており、この関係はもっと注目されてよい。明治三七年二月一〇日に日露戦争が始まった直後、緑雨から秋水に宛てて書かれた二月一五日付の書簡の内容が、六日後、二一日の『平民新聞』論説「兵士の謬想」にほぼそのまま引用されている。この論説は『幸徳秋水全集』（昭五七・四、日本図書センター）にも収められ、現在、秋水のものとして読まれているのである。

小稿では、改めてこの緑雨と秋水の関係を取り上げ、緑雨の書簡

と秋水の論説から、「非戦」の問題について、少し詳しく論じてみたい。そして両者が、互いに何を与え合ったのか探ってみたい。まず、緑雨の秋水宛書簡と、『平民新聞』論説「兵士の謬想」を対比し、日露戦争に対する「非戦」という態度において、両者が共鳴し合うことを確認する。だが、それは完全な一致ではない。緑雨は、秋水に感化されつつも、秋水の社会主義に追従していたのではない。逆に、秋水が明視しきれていなかった問題を緑雨が指摘し、秋水の方が緑雨によって啓発されていったという面もあったと思われる。緑雨が秋水に与えた視点や、両者の視座の違いについて考察したい。さらに、日露戦争に際して国民の愛国が叫ばれ、人々が急速に国家の一員として形成され従軍していく中で、緑雨の言葉が、同時代の「非戦」を訴えた作家や思想家たちの中でどのような位置を占め、どのような「非戦」のあり方に通じているのかということにも触れてみたい。

一

では、緑雨の明治三七年二月一五日付秋水宛書簡と、その六日後二一日の『平民新聞』論説「兵士の謬想」を対比する。まず、『平民新聞』の「兵士の謬想」を見る。引用は全文であり、少し長い。

「兵士の謬想」[1]（傍線は私に付した。以下同。）

[1] 現時の兵士及び其父兄の間に、恐るべく忌む可きの謬想を抱ける者甚だ多し、何ぞや、従軍の命に洩るゝを以て、非常の恥辱、若くば非常の不利益となすこと是れ也、吾人之を聞く、日々兵営に於て健康診断を行へる予備後備の兵士、皆な故らに踊躍して其用ゆ可きを示さゞるなし。[2]

[3] 或一人は極めて悪性の痔漏にして、若汽船の旅を重ぬれば中途に斃るゝは明かなるより之を除きしに彼れ頑として応せず足蹈鳴して其勇気を示し居たりき。

[4] 又或一人は病余と覚しく骨立見るに堪へず、無論だめなればとて診断を後廻しにせしに何時の間にか消失たり、八方捜索せしに彼は其不合格を察し診断の人人の間に紛れ込み居たりしかば引出して不合格を言渡せり、然るに彼は流涕して従軍を乞ふて已まざるより夫々照会の上輸卒となせり。

嗚呼此病人、従軍の途上に斃死して果して何の名誉ある乎、国家は何の得る所ある乎、而も憐れむ可し、彼等は従軍に洩るゝてふことを以て、非常の恥辱と迷信せる也。

[5] 又先頃衛生隊にて雇上居たりし三人の兵士を解任せしに彼等は帰郷を肯んぜず、国元の父兄の手紙を差出して動かざるより之を披見すれば、其文意は、平時御召上になり居たりし者戦時に解任さるゝは何か不都合ありしなる可し、不都合なしとせば強ても従軍を願ふべし、左らずば帰郷するとも家には寄付け難し、村の衆に対して何の面目あるか云々。

彼等父兄も又従軍に洩るゝてふことを以て、非常の恥辱と迷信せる也、如此きの事例は実に枚挙に遑あらず。

国家の目的を以て、戦争に在りと信じ、国家の為めに尽すてふことは直ちに従軍を意味すと心得、軍人となるを以て、人類以上の階級に上れるかの如くに思惟するは、現時の兵士及び父兄の間に於ける謬想[1]にして、而して其弊や極めて忌むべく恐るべき者たらずんばあらず、何となれば一国国民を挙げて戦争を好み、戦争に狂せしむるの最大主因は、実に這個の謬想に在れば也、而して古来武断政治、軍隊政治の惨禍は実に如此にして助長せらるれば也。

従軍に漏るゝを以て恥辱となすは、猶ほ恕す可し、彼等多く[6]の兵士中、其業務を抛ち、其妻子に別るゝをも省みず、強て従軍を乞ふ者、極めて卑しむ可き虚栄の心、利益の念に駆らるゝ者少なからず、彼等凱旋の日、軍帽頭に在り、勲章[7]胸に在り、佩剣鏘々として、巻煙草を吹かせば、一郷の老若皆な其前に平伏するの光栄を想望すれば、心中窃かに愉快に堪ざる者あり、安んぞ知らん、是れ汝が生涯の堕落に向つて、其第一脚を投ずる者なるを。

知れ兵士よ、其父兄よ、国家は戦争を以て目的とする者に非ず、国家は軍人のみを以て立つ者に非ず、衣なかる可らず、食なかる可らず、道徳なかる可らず、否な既に衣あり、食あり、道徳あらば、戦争なくして可也、軍人なくして可也、人の国家に尽す所以の者は、忠実に自家の職分を尽せば足るのみ、夫れ唯だ自家の職分に忠実なる、縦今一粒の米を産し、一片の金を掘るに過ぎざるも、其人や直ちに天下第一品の人格にして、国家第一の忠臣たらん、夫の生死一擲金鵄勲章[7]を賭するが如きは、袁彦道の亜流のみ、何の名誉と光栄あらんや、兵士よ、其父兄よ、速に其謬見を去つて、彼己氏[8]の煽動に乗せらるゝこと勿れ。

次に、緑雨の秋水宛書簡を挙げる。

（略）サテ非戦論ニ就テ一寸申上タイコトガアリマス　ソレハ惨事ダトカ何ダトカ制度ノ方カラ攻撃スルノモ宜シイガ　兵士[1]其人ノ謬想ノ方カラモ　モツト論サネバイケマイカト思ヒマス僕ノ聞イタ話デハ毎日何千トナク予備後備ノ健康診断ヲ兵営デ行ツタノニ戦争ノ妙デナイラシイ顔即チ不元気ノヤツハ百人ニ一人アルカ無シデ、一例ヲ挙グレバ或一人ハ極メテ悪性ノ痔病デコンナ者ヲ汽車ニ乗セ汽船ニ乗セテ連レテ行ケバ未戦ハザルニ弊ル、ニキマツテキル、ソコデコレヲハネノケルト其者頑トシテ応ジナイ　痛クナイフリデ足ヲ蹈鳴ラシテ用フベキヲ示シテキル　又或一人ハ長病ノアゲクデゞモアルカ骨立見ルニタヘナイ　無論ダメダカラ診断ヲアトヘ廻シテ暫ク控ヘサセテ置クトイツノ間ニカ消エテナクナツタ　八方捜索スルト自分デモハネノケラレル事ヲ察シテ診断済ノ人々ノ間ヘソツト隠レテ居タ

引張ツテ来テハネノケヲ言渡スト　流涕シテ軍ニ従ハンコトヲ乞フテ止マナイ　何トシテモ泣イテキテ仕方ガナイノデソレ〳〵照会ノ上、輸卒ニシタ、

コンナ話ハマダ澤山アル、衛生隊カ何カデ雇ヒ上ゲテアツタ三人ノ兵ヲ先頃解任シタガ　ドウシテモキカナイ帰郷シナイ国元ノ父兄ノ手紙ヲ差出シテ動カナイ、其手紙ニ何ガカイテアルカトイヘバ　平時御召上ニナツテ居タモノガ戦時ニ解任サレルヤウデハ　何カ不都合ガアツタニ相違ナイ、不都合ガナイノナラ強テモ従軍ヲ願ヘ　ソレガデキズバ帰郷シテモ家ヘハヨセツケヌ　村ノ衆ニ封シテ何ノ面目ガアルカトイフヤウナ意味ガツラネテアル

別離ノ悽惨トカ何トカイフノハ家ヲ出ル迄ノ事デ兵営ヘ来レバモウ俎上ノ魚デアキラメテキルノダトモ言ヘマセウガ　シカシ実情ハサウデナイ　人々ノオダテニ乗ツテソシテ内心ニハ金鵄勲章ノ夢ヲ見テキルノデス（略）

右の二つの資料を比べると、『平民新聞』「兵士の謬想」には、緑雨の言葉が非常に多く入り込んでいることが分かる。「兵士の謬想」というタイトル、当然のように健康診断を受ける兵士の様子、「痔漏」や、「病余」にも関わらず従軍を乞う者たちの姿、兵を「解任」されても家族の圧力によって「帰郷」できない者たちの姿、「扇動にのせら」れ、「利益の念に駆られ」て「勲章」や「光栄」を夢見る兵士たちの「虚栄心」の指摘など、緑雨の手紙からほぼそのまま引用されている。兵士やその父兄の抱く「謬想」への痛烈な批判は、もともとは緑雨のものだったのである。『平民新聞』の論説「兵士の謬想」は、緑雨の論と言っても過言ではない。

緑雨はこの秋水宛の書簡を次のように書き始めている。

急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナツタト申シマスノハ　小山田ガ第二師団ヘ廻サレテ出征ノ途ニ上ルベキ命令ヲ受ケマシタノデ僕ハオ抱ヘノ医者ガナクナツタ訳デス

三十九度五分ノ発熱中ヲ車ト人トニ扶ケラレテ昨夜ヨギナク上野ステーション迄参リマシタノデ　今朝ハ殊ノ外ノ弱リ方デス

バカナ話デス　他ノ見送人ハ僕ノ病気ナドハ少シモ問ハナイ　万歳ダノ大勝利ダノト喉ノ裂ケルヤウナ声ヲ出シテ居マシタ

周知のように、日露戦争に際して秋水は「非戦論」を展開していた。それを受けて、緑雨も、「急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナツタ」と書いている。小山田とあるのは、小山田家に養子に行き、軍医となっていた緑雨の末の弟、謙のことである。緑雨の言葉が、実弟の出征に際して、日露戦争の戦意高揚の気運のただなかで述べられた言葉であり、また後に続けられていく批判の鋭さを考えるとき、やはりこの書簡の文章は、秋水の「非戦論」を一つの梃子として述べられていった、緑雨の「非戦論」であったと言える。(4)

そしてこの文章は、それまで続けられてきた秋水との交友関係の

中から、緑雨が受け取ってきたものの一つの結実を、象徴的に表しているようにも思われる。[5]

緑雨と秋水は、「非戦」という点で影響しあい、共鳴しあっているのである。

二

では、緑雨は秋水にどのような視点を与えているのだろうか。そして、緑雨の視座の特質は、どういったところにあったといえるのだろうか。

日露戦争は、民衆の中に愛国の気運が高まり、「国民」として国家を支える役割を担い始めた戦争であるとされる。やはり「非戦」を訴えた内村鑑三も、「日露戦争より余が受けし利益」（『新希望』明三八・一一）の中で、「私は甚だ驕慢なる申分かは知れませんが、日本国民が此戦争に熱狂するのを見て、我が最愛の友が放蕩遊惰に身を持崩しつゝあるのを目撃して居るやうな感が致しました。」と述べ、国民の熱狂に対する不快感をあらわにしている。緑雨の、兵士やその父兄の「謬想」という指摘は、いち早く正鵠を射たものであった。

先に挙げた緑雨の明治三七年二月一五日付秋水宛書簡は、二月一四日の『平民新聞』に掲載された秋水の論説「兵士を送る」を受けて書かれている。ここで秋水は、「兵士」を「憐れむ可」きものとし、「諸君の田畝は荒れん、諸君の業務は廃せられん、諸君の老親は独り門に倚り、諸君の妻児は空しく飢に泣く、而して諸君の生還は元より期す可らざる也、」と家族の別離の悲しみを描き出す。そして、これを「社会制度の罪」としている。社会主義者の秋水が、批判の矛先を「国家」や「社会制度」へと向けるのは、当然の事であっただろう。だが、緑雨は書簡の中で、そういった方面への攻撃だけでは不十分なことを指摘したのである。緑雨の描く兵士やその父兄の姿は、生々しくリアルである。先ほど挙げた緑雨の秋水宛書簡の続き、後半部分を見ておきたい。

諸君ノ田畝ハ荒レント言ツテモ其諸君ハチツトモ驚カナイ　勲章ヲサゲテ剣ヲガチヤ〳〵イハセテ巻煙草ヲフカセバ村ノ人タチハ皆平伏スルモノト思ツテヰル　其平伏ノタメニハ田畝ナドハ考ヘテ居マセン（略）ナルホド制度モワルイ、新聞ナドノオダテモワルイ、ソレハソレデ攻撃スベシデスガ　一面ニ兵士及ビ其父兄ノ謬想ヲタヾシテヤラネバイケマセヌ　平民新聞ノ非戦論ハ前者ノ攻撃バカリデ　後者ノ説得ガナイト思ヒマスガイカヾデスカ（略）趣意ハ両面カラオヤリナサルヤウニト申スノニ在ルノデス

緑雨は、理想の制度を夢見る秋水の前に、狡さも愚かさも併せ持つ民衆の実体を突き付け、「国家」や「社会制度」だけではなく、戦争へと突き進む勢力となった「国民」の姿を捉え、そこに訴え

て、「非戦」へと「説得」していくことの重要性を述べたのである。これは、秋水にとって重要な視点となり、秋水の「非戦論」に、独特の奥行きをもたらしていくことになる。

秋水は、緑雨の助言を取り入れる。「兵士の謬想」と同日に掲載された論説、「戦死者の遺族」（『平民新聞』明三七・二・二一）では、次のように述べている。

世人は戦死を以て名誉となせり、光栄となせり、彼等死者の遺族も亦戦死を以て、名誉となさん、光栄となさん、此光栄と名誉との為めには、一切の快楽、安慰を犠牲となすも、猶ほ可なりとなさん、此光栄と名誉とは、如何の苦痛、悲傷をも償ふて余ありとなさん、社会は如此く断定す、新聞紙は如此く命令す、而も其浮誇、虚栄の念を去つて半夜窃かに其良心に向つて問へ、窃かに自然の性情に向つて問へ、この名誉と光栄とは真に一時の名誉光栄に非ざる乎、此悲傷と苦痛とは、遂に百年癒す可らざるの悲傷苦痛に非ざる乎、而して彼等は依然戦争を以て善事となす乎、

このように、秋水は、人々の心の奥にある真の悲しみを、偽りなく見つめることを呼びかけているのである。

秋水の「非戦論」は、深化していく。秋水は、「戦争と新聞紙」（『平民新聞』明三七・三・六）で、新聞報道のあり方について次のように述べている。

彼等の所為は正確に之を報道し忠実に之を評論するよりも、唯だ之を謳歌し、之に阿媚し之を教唆し煽動して、其長からざらんことを是れ恐るゝ者の如く然り、（略）而して彼等の如上の言説が、社会人心に向つて与ふるの影響は、果して如何、戦争は国民最高の事業として重んぜらるゝに至れるに非ずや、虚栄は国民最高の道徳として見らるゝに至れるに非ずや、（略）二十世紀文明の智識道徳を解するの国民は、忽然として中世紀戦国時代の陣笠雑兵に退化するに至れる也、

秋水は、新聞報道が戦争を「謳歌」し、「煽動」することによって、人々が戦争を「国民最高の事業」とし、「虚栄」を「国民最高の道徳」として、「中世紀戦国時代の陣笠雑兵に退化」していると指摘している。そして、こういった報道のありかたを非難し、「其酔狂より醒めよ、而して更に国民を醒ませ」と訴えるのである。

また、「戦争と小学児童」（『平民新聞』明三七・三・二〇）では、以下のように書く。

恐る可き哉、各地の小学校は、又少年少女の智徳の練磨、性情の淘冶の場にあらずして、殆ど一種の狂熱煽揚の具とならんとす。

見よ今や小学の児童が日夕口にする所は征露の軍歌也、観る所は陸海軍の図画也、行ふ所は模擬の戦争也、而して只管戦争を謳歌し、戦争を尊重し、戦争に随喜して狂するが如し、（略）

教師は之を賞し、父兄は之を喜び、社会及び「社会の木鐸」たる新聞紙は、嘖々之を賛して、所謂「挙国一致」の例証となすもの、如し、嗚呼是れ真に賞すべく、喜ぶべく、賛すべきのことなる乎。（略）人を救ひ人を活すの高きことを思はずして、人を苦しめ人を殺すの壮なるを信ぜんとする也、而して出来するの国民は果して如何なる国民なるべき乎、文明の国民乎、正義の国民乎、道徳の国民乎、彼己氏の所謂大国民乎、否な唯だ戦争の弥次馬のみ、然り弥次馬のみ、

ここでは秋水は、教育の名の下に、戦争の「謳歌」や「尊重」が「児童」たちに植え付けられていく小学校の現状をとらえている。そして、そこで出来上がる国民とは、「戦争の弥次馬」でしかないと述べ、学校教育を批判していくのである。

このように、秋水の論は、戦意を煽られ、何の疑いもなく戦争を肯定している人々に対する批判的な視点を含みながら、新聞メディアや学校教育といった日常的次元から人々を駆り立てている仕掛けをあばき、その是正を訴えるようになっているのである。秋水の「制度批判」や「新聞批判」に、こういった視点を与え、深化させていったのは、緑雨の言葉であったといえる。

秋水にとって、緑雨は大きな存在であった。緑雨の死に際して、秋水は「筆のしづく」（『平民新聞』明三七・五・一～二九）で、「近日何ぞ傷心の事多きや、緑雨は窮死し、（略）我は中心転た寂寞の情に堪へず、意強き人は女々しと笑はん、我は到底情を矯むるの力なし。」と述べている。緑雨の死に衝撃を受け、深く悼んでいる様子がうかがわれる。そして秋水は、「上に掲ぐるは緑雨の肖像なり、（略）眉目の間、如何に天才のきらめけるかを見よ、」と、緑雨を「天才」と呼んでいる。

さらに、「緑雨に就て」（『中央公論』明四〇・一〇）では、「緑雨が今の文壇に多くの敵を作つた」としたならば、それは「緑雨其人の恥辱でなくて、偶々以て今の文士社会が如何なる空気に満て居る歟が覗はれる」のだと述べ、緑雨を弁護している。

また秋水は、緑雨の書簡を、「我敬愛して措かざりし友の、血の痕、涙の痕である。」と言い、「予去らば、彼等はおのづから売られ棄てられ毀たれ焼かれて散失せるであらう。せめては予の手許に在る間に於て、極めて穏かな差支へのない分だけでも、公けにして置かうと決心して」、幾通かの書簡を公表している。[6] その残りの書簡は、秋水が大逆事件で処刑された後、二束にして特別に纏められていたという。[7] 秋水にとって、緑雨は生涯決して忘れられぬ畏友であった。

だが緑雨は、秋水の歩む社会主義実現の道に、追従していたのではない。『平民新聞』を創刊する秋水の奮闘を見つめる緑雨の書簡の言葉にも、この両者の立場の差が現れている。明治三七年二月一一日付の秋水宛緑雨書簡から挙げる。

発生ノ時日ヲ思ハズニ欧洲ノ事例ヲ今スグ日本ヘ持ツテ来テモダメデス（略）

斃レテノチ已ムナド、イヒマスガ斃ルレバ已ムノハ当リ前デス（略）主義ノ十ヲ一度ニ行ハントシテ苦ムヨリモ三行、四行、五行、ト方便交リニ順次ニ進ム方ガイ、デハアリマセンカ　遂ニ十モ廿モ行ヒ得ルコトニナリマス（略）

階級打破ハ結構デスガ　今ハマダ階級ガアルノデスカラ　ヤハリ中流ドコロヲ目蒐ケテ地歩ヲ占メネバダメデス（略）今ノ社会ノ勢力中心カラ段々ハナレテシマヒマス　ソレデハ主義ノ弘通ニ大障礙ヲ来シマセウ

「発生ノ時日ヲ思ハズニ欧洲ノ事例ヲ今スグ日本ヘ持ツテ来テモダメデス」という緑雨の言葉は、鋭い指摘ではなかったか。緑雨は、社会主義そのものを否定していたのではない。緑雨は、「主義ノ十ヲ一度ニ行ハントシテ苦ムヨリモ三行、四行、五行、ト方便交リニ順次ニ進ム方ガ（略）遂ニ十モ廿モ行ヒ得ルコトニナリマス」、あるいはまた、「今ノ社会ノ勢力中心カラ段々ハナレテシマ」うと「主義ノ弘通ニ大障礙ヲ」きたす、と述べている。このように緑雨は、秋水が「欧洲」からもたらされた理想だけを夢見て突き進む事を諫め、現実の日本社会の中で一定の勢力を保ちながら、「中流ドコロヲ目蒐ケテ地歩ヲ占メ」、進んでいかねばならないと言っているのである。このことは、四日後、二月一五日付秋水宛書簡の中で、緑雨がこの一一日付書簡の内容を総括して、「要スルニ現世ニ主義ヲ行ハントセバマルデ現世ヲハナレテハナラナイ、埃リヲアビルノガイヤナラオモテヘ出ヌガヨシ　水撒車ハホカノ車ヨリモヨゴレテキタナイト申シタヤウナ訳」と述べていることからも伺える。

後に木下尚江は、「廃刊を祝す」（『東京社会新聞』明四一・九・一五）で、「今まで日本の社会主義と云ふものが、言論の皮相以外何程の価値を持つて居たかと云ふことは、諸君が各自に熟慮を要する問題であらう。」と書き、日本の社会主義が、現実の中に強固な根を張っていけなかったことを悔いている。緑雨の指摘は、早い時点で、鋭いところを突いていたのである。

このように、秋水との関係の中で見えてくるのは、緑雨の特質が、あくまでも現実に密着し、その根底を見つめようとするところにあったということである。緑雨は、現実を忘れて飛翔することを警戒するのである。

緑雨の生涯は、貧困に苦しみ続けた生涯でもあった。緑雨は、右に挙げた二月一一日付の書簡の中で、「主義モ意見モ生活問題ノノチノモノデス　僕ハコノ点ニ於テ太ダ冷カデス　冷カニナツテヲリマス　世間ガ冷カニシテクレマシタ」、と書いている。秋水が、「緑雨に就て」（前出）の中で、「北風身を切るやうな晩を、骸骨のやうになつて咳入りながら、本所の横網から有楽町まで、僅かの小遣ひを相談に来たのも幾度であつたらう、彼は其瞑目の二三週間前ま

で、重体の病苦を忍んで米代を拵へに歩いたのだ。」と書き残しているように、緑雨は死の床に伏してなお、貧しさに苦しまねばならなかった。緑雨を一つの主義に酔わせなかったのは、この徹底的に醒めた眼差しであった。そしてこのことが、後に述べるように、個に徹し、市井の人々を見つめようとする晩年のアフォリズムの視点に繋がっているのではなかろうか。

日露戦争については、秋水の他にも、先に挙げた木下尚江や、内村鑑三、そして徳富蘆花といった人々も「非戦」を唱えていた。彼らが、根本的なところで影響を受け、一つの拠り所としていたのは、社会主義であり、あるいはまたキリスト教であった。こういった中に、最初にあげた緑雨の明治三七年二月一五日付秋水宛書簡をおいてみれば、それは一見、確固たる拠り所を持つことのなかった「非戦論」にも見える。しかし、個に徹し、ひたすら現実を見つめるところで生まれてきたものである。そういう意味で、緑雨の指摘は特異であったといえ、そこにまた、何らかの可能性を探ることも出来るのではないだろうか。

三

緑雨の「非戦」が、社会主義にもキリスト教にも依拠するものでないとすれば、それはどういったところからもたらされているのだろうか。

緑雨は、アフォリズムの中で市井の人々を見つめ続けていた。その視線は、社会主義者の視線に重なるところもある。『平民新聞』は、雲水道者談・秋水生筆記「東京の木賃宿」（明三七・一・一〇～三一）の中で、次のように下層社会を描き出している。

連込みの客多きは浅草の木賃宿にて、之に次ぐは深川、四谷、本所なり、麻布には左まで多からず、（略）

連込みの客の統計を聞くに、市内二百余戸の木賃宿にて、一昼夜に少くも八百組乃至千二三百組はあるべく、此外安宿ごろつきといへる婦人五六百人の多きに及べり。

爰に哀れは夫ある身の情けを粥ぎて、其日の代の足とするものも少からず。

緑雨もまた同じ世界を見つめ、一連のアフォリズムに描いている。

○称のきたなきも姑しなればゆるしたまへ、数ある中にも彼の安私窩子なるもの、わが聞き知れる所にては、人の妻ならぬは無かりしやうなり、浅草にても、本所にても。

○昼はぶら〳〵と酒の香去らぬ唧楊子、夕暮よりかけておのが女房のもとへ客を引き来る亭主の、胸毛こそ深けれ獣にもあらず、あさましき事なり。今の男の起ちかゝりて起ちもせず時移したるは、おもふに汝が引き留めしなるべし何故のひそ〳〵声ぞと、これをはじめに棟割長屋の内と外にて、一夜に三度は必ず定例の如く喧嘩する夫婦、本所にありたり。

（「おぼえ帳」明三〇・四～一二）

緑雨も最下層の世界を見つめ、身を売る女たちを描いている。しかし緑雨は、この下層社会の悲惨さを、「社会制度」の変革へではなく、滑稽へと昇華させていく。

○類はさま〳〵、この泥沼に棲む虫のうちにも、岸から岸を渡り者といふが矢張ありて、往々家を駆出すに抱主は衣取上げ、蒲団にくるみて品物の如く座敷に放下し置き、客あれば其処へ押入るゝといふは、浅草にてきゝたる話なり。屋根代、飯代、蒲団代とて僅少の中より差引かるゝにより、この女何事も力及ばず、生れながらの昔に還りて、常に素裸なり。

○蜘々、から蜘よと六歳許なる男の児の草鞋穿きて朝夕呼び来るを、あれも人のと物好なる嘸衆の走り出でゝ素性を問へば、児は早くも眼をうるませて、父は先頃歿り、母は今病の床にと言ふに、いぢらしと人々寄集まりて、要るも要らぬも買ふて遣れば、児は嬉しげに空籃担ぎ、看返り〳〵橋一つ越えしが、其処に立ちたる女の傍へ、阿母あ、もうみんな売つちまつたと駈寄れば、女は児の頭撫でつゝ、爾か早かつたね、今日は何遍泣いたえ。まことは父は入牢の身なりしと。（「おぼえ帳」同前）

描かれる人々は、卑小であり、どこか悲しい。だがその卑小さや悲しさは、滑稽な「笑い」へと昇華されているのである。

自らも貧しさの中にいて、組織をなさず個に徹し、世の中の現実を直視し、愚かさも受け入れつつ、滑稽な人間の姿を「笑い」の中に描くこと。それこそが、「道徳」によって美しいあるべき「国民」像が形成され、戦争へと向かう時代の中での、緑雨の抵抗の拠り所だったのではないだろうか。

これまでにも述べてきたが[8]、緑雨は儒教的な「道徳」にたいする批判を続けている。少し挙げてみる。

○大方は忠孝を誤解せる教員の下に、偶然ならぬ此生徒を置かんは惜しからずや。高等科の一年なりしか、二年なりしか、『楠正成は木にて造り忠義の為に用ふるものなり』と書きしに、受持の目に稜立て、懲らしたれど、気を平かに傍らより読下せば、おのづから興味の溢るゝ如きを覚ゆ。仮に之を風刺といはんか、かくも巧なるは今の文界に見も及ばず。

（「仕入帳」明三四・一～七）

緑雨は「忠孝」を嘲笑する。そしてまた、次のようにも言うのである。

○道徳とハ縄張の如きもの乎潜るに罪あるべし飛越すに何の罪ぞ風来なりしとおぼゆ賭博と盗賊と密通とさへせざればよし然れどもわれを以て言はしむれバ賭博もよし盗賊もよし密通殊によし道徳といひ法律といふも畢竟ハ雲か霞、ありとハ見えて界定かならずあらゆる天下の罪を一遍通り犯しぬいたる時に於て初

めて人間の妙ハ現はるゝものにあらざるか

（「二つ三つ」明二八・九）

○更におもふ、人生の妙ハ善ありて生ずるにあらず、悪ありて生ずるなりと。世に物語の種を絶たざるもの、実に悪人のおかげなり。吾をして歴史家たらしめバ、道真を伝ふるに勉めんより、時平を伝ふるに勉めん。吾をして戯曲家、小説家、若くハ詩人たらしめバ、徒らに神の御前に跪かんより、悪魔とゝもに虚空に躍らん。

（「眼前口頭」明三一・一～三三一・三）

緑雨は、「道徳」や「法律」といった既成の枠を越え、「悪」や「罪」と呼ばれるものを「犯しぬいた」時に、「人間の妙」や「人生の妙」が現れるという。

このような緑雨の言葉は、例えば、太平洋戦争後に述べられた坂口安吾の次のような言葉を彷彿とさせる。

・自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく堕ちる道を堕ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦堕ちることが必要であろう。堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。

（「堕落論」昭二一・四）

・我々はかかる封建遺制のカラクリにみちた「健全なる道義」から転落し、裸となって真実の大地へ降り立たなければならない。我々は「健全なる道義」から堕落することによって、真実の人間へ復帰しなければならない。

・堕落のもつ性格の一つには孤独という偉大なる人間の実相が厳として存している。（略）孤独という通路は神に通じる道であり、善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや、とはこの道だ。

（「続堕落論」昭二一・一二）

安吾は「武士道」や「封建」的「道義」に依存するのではなく、孤独の中で、善も悪も混然となった自分自身の道を「堕ちきる」ことによって、「自分自身を発見」し、「救い」、そして「真実の人間へ復帰」するのだと述べる。それは、緑雨の言葉に響き合うものがある。そして安吾は、「道化（フルス）」という文学のありかたを模索していたのである。

緑雨の視点は、時を隔てて太平洋戦争後、安吾によって見出されていく道へと通じていくと思われる。

「道徳」や「武士道」といった美しい物語を剥ぎ取り、現実をごまかしのない眼で捉え、滑稽な「笑い」の中に描いていくこともまた、「非戦」に繋がる一つの生き方といえるだろう。

では緑雨は、アフォリズムの中で、戦争というものをどのように見つめていたのだろうか。日清戦争後の世の中を、緑雨は次のように見ている。

○軍人の跋扈を憤れる人よ、去つて浅草公園に行け、渠等が木戸

銭ハ子供と同じく半額なり。

（「眼前口頭」前出）

○寄席に日本亭、貸座敷に世界楼はわが歳の尚十代なりける比よりのことなれど、これにひとしき家名の、廿七八年役以来夥しくなりて、萬歳亭と称する牛屋さへありしが、まことや戦争は際物なるとゝもに、漸く廃れて今はまた旧にかへりぬ。石鹸、歯磨、巻煙草の名も紛らはしきほどなりしも、同断なり。

○やまと、敷島、皆よきものには用ひられず。東洋館と称する下宿屋、芝に神田に本郷に、わが知れるのみにても五軒以上ありたり。

○無類は森川なる煙草店の、缸瓦寮屋と名けられし事なり。但しこれは、戦死者の縁故あるによれるなりと。

○膺てや懲せや清国と、和議未調はざる折のことなりき。生れし一子が名を凱旋と命じ、区役所に届け出でたる者あり、掛の人々笑止がりて賺したれど、遂に肯かざりしとなり。成長の後、世に顕るゝにつけ、隠るゝにつけ、斯くばかり際立ちたるはなかるべし。

○戦争後、勝利と称する小芸妓あり、凱旋と称する娼妓あり。

（「ひかへ帳」明三一・一～一二）

緑雨は、日清戦争後、勝利に酔っていく世の中を、茶化しつつ、ある苦々しさを持って見つめているのである。

やがて緑雨は、アフォリズムの中で、日本の軍国化や国家主義化に対する、からかいや拒絶を顕わにし始める。

○いさぎよやの大和魂を歌にきけば、朝日に匂ふ山櫻花といへり。腹掻切りて死するにさへも猶美事にとの形容詞を受けざる可らず。今昔の差ひは言はずもがな、武士道は中々骨の折れたものなり。ただ頭割勘定のいざ跡腹となりて、いつも太だ美事ならぬ奴も、荐りに之を奨励するによれば、何処か自然に融通は附くこと、見えたり。

○泰山は土壌をゆづらず、されば小論客あり、小策士あり、小銀行あり、小雑誌あり、剰さへ小勧工場ありて、これらの相集合し、抱合し、化合せるものを、大日本国と称するなり。富嶽は、屹然雲表に秀て、千秋ゆるがぬ御世の姿を、世界に誇示せり、写真に誇示せり。

（「半文銭」明三五・二～八）

このように緑雨は、「武士道」を笑い、「大日本国」という美々しい覆いを剥ぎ取って、その卑小な実体を暴露してみせるのである。さらに、緑雨は、次のような痛烈な言葉を発する。

○日本は武士国なりき。刃を避けざる武士の勇気を以て、人類一般の勇気を誤解せる国なりき。有識なるべき人の論評にも、今猶この傾向を存す。武士国は野蛮国なり、武士国の勇気は野蛮

国の勇気也。

（「大底小底」明三六・五～七）

緑雨は、ここで、日本が武力を用いていくことを否定している。この言葉もまた、緑雨の「非戦」の言葉であったと言えよう。

緑雨は、市井に生きる人々の姿を見つめ続け、からかいや滑稽といった茶化しの態度を一つの拠り所としながら、「軍人」や「国家」の権力に対峙する姿勢を取っていく。そして、アフォリズムにおいても「非戦」の言葉を発するに至っているのである。

緑雨が、秋水に宛てた書簡の中で、「急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナツタ」と述べたのは、唐突な思いつきではない。緑雨がその生涯の晩年に、秋水との深い交友を続けていったのは、立脚するところは異にしながらも、緑雨の内奥に、秋水と深く響き合うものがあったからである。

おわりに

緑雨と秋水との交友は、表面的なものではない。国家主義化し、日露戦争へと突き進む時代への違和感を抱いた二人が、それぞれ独自の姿勢を保ちながら拮抗し合い、深く関わり合っていたのである。

緑雨が、死の直前に遺した「僕も非戦論でも書きたくなった」という言葉は、時代と烈しく格闘していた緑雨の姿を表している。そして秋水への書簡からは、現実の世の中や、狡さも愚かさも併せ持つ人間の真の姿から離れてはならないと訴える緑雨の姿が浮かび上がってくるのである。この背景には、緑雨がアフォリズムにおいて、軍国化していく「国家」と対峙しながら、市井に生きる人々の姿を鋭く見つめ、描き続けてきたということがあったのである。

「もし」ということはあり得ないとしても、「もし」その後しばらく緑雨が生き続けていたとしたら、秋水は「大逆事件」に性急に巻き込まれていっただろうか。そして緑雨は、秋水の処刑に際して、一体どのような言葉を発していただろうかと、考えてみずにはいられないのである。

注

(1)『近代文学試論』（二〇〇四・一二）、二〇〇三年一二月二〇日に開催された広島近代文学研究会での発表をもとにしている。

(2) 第二三条　左の各号に該当する演劇は興行することを得ず

一、勧善懲悪の主旨に背戻するもの

二、台詞、所作等にして猥褻又は惨酷に渉るもの

三、政談に紛はしきもの

四、前各号に該当せざるものと雖台詞、所作等に於て公安若は風俗を害するの虞あるもの

（東京都公文書館資料。但し、旧字体を新字体に片仮名を平仮名に改め、濁点も施した。）

(3) 木村毅氏は、「斎藤緑雨の一面―幸徳秋水との交情について―」（『伝記』一九三六・七）で、「神崎清君は、緑雨が幸徳秋水と親交あり、且つ『平民新聞』に寄稿したのを材料として、彼が社会運動に関心をもつた事を指摘し、彼の進歩性を認めやうとした。これは観方としては緑雨に新ら

しい陰影を添へるものであるが」、データが不足していると述べ、その材料を提供するとして、小泉三申氏から受け継いだ緑雨の秋水宛書簡を公開している。小稿は、こういった指摘の延長上に、両者の関係の内実を探る試みであると言えるかもしれない。

(4) 小山田謙氏は、「弟の記憶に残った斎藤緑雨の半面」(『文藝春秋』一九二九・一〇)で、「僕を兄弟中で一番可愛がつてくれた」と述べている。また出征の日のことについても、「僕は明治三十七年の二月の或夜第二師団の野戦病院附として仙台へ向かふとき兄は上野駅へ送つて来てくれた。【躰を大事にしていつて来てくれ、己はお前の帰るまでに死ぬと思ふ。プラットホームは混雑してイヤだからこゝで別れる】、【寒いのにどうも有難う、どうぞ御大事に】といつて待合室で手を握り合つて別れた。これが僕との永遠の別れであつた。其時の兄の淋しい顔はとても忘れられない。」と述べている。弟を戦地へ送る緑雨の心痛が伝わってくる。なお、『斎藤緑雨全集』第八巻「年譜」(二〇〇〇・一、筑摩書房)には、「二月(一四日)、弟謙を仙台の第一(ママ)師団野戦病院へと送る。」とあるが、これは「第二師団」が正しいのではないかと思われる。

(5) 小山田謙氏は回想録(前出)で、緑雨と秋水の交友に言及し、秋水について、「僕にも偉い処のある人だと嘗めて居た。」と述べている。

(6) 「緑雨の書簡」(『読売新聞』明三八・一一・五~一二・二四)。ここには、明治三七年二月一五日付緑雨書簡は含まれていない。

(7) 木村毅氏は、前掲論文で、「茲に掲げる緑雨の手紙は、凡て幸徳秋水に宛てたもので、どういう積もりでか分らないが、秋水が二束にして保存してゐた。大逆事件前後の紛雑で、彼の簿書悉く散佚したであらう中に、是のみが纏められてゐた事は、秋水に於て何かの考へがあつたらしいのだが、今日からは知る由もない。断頭台に上つた秋水の後始末は、凡て小泉三申氏がせられた。此れは世間周知の事実で、その時若干の秋水の遺品と共にこの緑雨の手紙も先生の保管に下に移つた。」と、その経緯を述べている。

(8) 拙論「斎藤緑雨の【恋】と【闇】—恋愛神聖論から道徳回帰への時代の中で—」(『近代文学試論』二〇〇二・一二)、また、注(1)に挙げた拙論でも、緑雨が「道徳」に対峙し続けていることについて述べている。

〔付記〕

小稿は、二〇〇四年六月二〇日に開催された広島大学国語国文学会春季研究集会での発表をもとにしている。

—つかもと・あきこ、和歌山工業高等専門学校助教授—